

日本における文化資源の社会的還元について：博物館と遺跡公園の現状を踏まえて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 多々良, 穰 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38358

日本における文化資源の社会的還元について ～博物館と遺跡公園の現状を踏まえて～

金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程2年
多々良 穰

要旨

ユネスコ世界遺産や博物館・遺跡公園が増加している今日、歴史と関連した施設と現代社会との結びつきは、真剣に取り組まなければならない重要な文化資源学の課題である。近年使われ始めた文化資源学という用語の定義は、まだ定まっているとは言い難いが、人類の遺した文化を保有する意味で、博物館や遺跡公園を有形文化資源と捉えることができる。博物館は「地域志向型」・「中央志向型」・「観光志向型」に分類できるが、体験学習や地域でのイベント協力などを行い、一般市民も主体的に活動できる「地域志向型」が増加している。

博物館と遺跡公園をセットに考えると、博物館のみの「単独型」、遺跡公園に博物館が備わっている「併設型」、そして観光開発と結びついて遺跡公園化する「公園型」に分けられる。一般市民が歴史に親しみやすく、理解しやすくなるように工夫された「併設型」が多くなっているが、この型の博物館では、講座や講演会はもちろんのこと、体験学習の場を積極的に提供し、出前授業などの学校との連携を深める活動を重視している。体験学習は、文化資源を理解するための重要な方策である。また、地域との結びつきを深めるため、イベントやボランティア員の受け入れ、検定試験などを利用した文化資源教育が必要である。

最近、文化資源を利用した町づくりを進める地域も出てきている。山口県萩市は、町全体を博物館に見立てた「まちじゅう博物館構想」を推進している。「萩博物館」を中心に歴史の高い価値を再認識し、文化資源を保存しながら観光客を迎えてもてなす観光体制づくりを進めている。また、長野県茅野市では、行政が遺跡を基礎にした「町づくり」を試みる「縄文プロジェクト構想」を実施している。「尖石縄文考古館」を中心に、住民生活の基礎となっている縄文文化を見直し、市民が縄文文化の知識をつけて観光客をもてなす「市民総学芸員化」を目標としている。このように、地域アイデンティティの形成も視野に入れ、文化資源を活用していくことが必要であろう。マスコットキャラクターによって、地域と密着した親しみやすい博物館・遺跡公園にしようという姿勢が見られる。このことは、観光面でも有益であろう。

キーワード

博物館、遺跡公園、社会還元（教育普及活動）、地域アイデンティティ

Giving Tangible Cultural Resources back to Society: Museums and Heritage in Japan

TATARA Yutaka

Abstract

These days, UNESCO World Heritage Sites, museums and historical parks are increasing, so cooperation between modern society and historical institutions is an important problem of Cultural Resource Studies that must be grappled with seriously. The definition of Cultural Resource Studies that began to be used recently has not been fully established yet, but museums and archaeological sites are regarded as tangible cultural resources. Museums can be classified as "region-oriented type", "center-oriented type" and "tourist-oriented type". "Region-oriented type" museums, which hold trial classes and sponsor area festivals, have increased and grown in popularity.

In this paper, I am dealing with museums and archaeological parks as sets. These can be classified into "solely museum type", "park with museum type", and "tourist park type". The "park with museum type", where the general public is familiarized with history and the museum workers come up with ideas to make history easy to understand, has increased. This type of museum positively provides place for hands-on learning, and deepens cooperation with schools through giving lectures and delivering classes. In addition, this type of museum appears to be encouraging interest in cultural resources and deepening exchanges with the local community in the following ways: by holding events at the museum, by asking for cooperation of volunteer employees, and by using mascot characters. These ideas would be useful for tourism development as well.

Recently, areas to promote community development using cultural resources are also appearing. Hagi, Yamaguchi Prefecture, which is promoting the "Town Museum Concept" likened the whole town to a museum. And Chino, Nagano Prefecture, conducts "Jomon Project Concept" which is an attempt to show urban development on the basis of the ruins. We need to utilize cultural resources in order to strengthen local identity.

Keywords

museum, archaeological park, returning to society, local identity

1. はじめに

近年「文化資源」という用語がよく使われている。そして「文化資源学」という語を看板に掲げた大学や研究所も出始めている。しかし、まだこれらの定義や意味づけ、目的や方向性が固まっているとは言い難く、つかみどころのない表層的な概念であり、具体的な議論はまだなされていない

と思われる。「文化資源」という用語は、文字通り「文化」を「資源」として見る考えに基づいている。ある時代の社会と文化を知るための手がかりとなる貴重な資料の総体を指し、博物館や資料庫に収めきれない建物や都市の景観、あるいは伝統的な芸能や祭礼など、有形無形のものも含まれるとされている(文化資源学会HP)。有形文化資源に限定すれば、生活用品や芸術品などの遺物・建

造物・遺跡ということになる。したがって、さまざまな遺物を取めている博物館や遺跡公園も、文化資源と捉えることができる。これからの時代は、文化資源としての遺物や遺跡を一般市民や社会にどう還元するかを考えていくことが、研究者の責務である。そこで本論では、博物館に関する研究史を整理したうえで、博物館や遺跡公園が一般市民に対してどのように活用されているか見ていきたい。さらに博物館や遺跡公園の枠組みを越え、文化資源を地域コミュニティ作りに活用している事例を取り上げながら、今後の文化資源の社会的還元として有効な方策を考察したい。

2. 文化資源学

最近、「文化資源学」を対象とした大学の研究科や研究施設が誕生している。東京大学の人文社会系研究科では、2000年に文化資源学研究専攻が設置された。また、2004年には国立民族学博物館に文化資源研究センターが、2011年には金沢大学人間社会研究域に国際文化資源学研究センターが充足している。また、近畿大学文芸学部でも文化・歴史学系の一つに文化資源学系が、島根県立大学短期大学部の総合文化学科でも文化資源学系が設置されている。では、「文化資源学」とはどのような学問なのか。

日本の「文化資源学」の草分け的な存在である木下によれば、人間の文化的・社会的営為を研究対象とする人文社会系研究の共通基盤をなす多種多様な資料（文献資料、歴史資料、美術資料、考古学資料、文化調査資料、文化統計資料等）を整理・総合し、次世代文化形成の資源として利活用できるようにするために、個別専門分野に継承されてきた専門知識を統合する新たな総合的な研究分野が「文化資源学」である（木下 2004）。東京大学では、2000年に人文社会系研究科に文化資源学研究専攻が設置されたが、大学院のみで学部に対応する専修課程を持たない。そのことは、資料の調査、発掘、考証、評価、整理、保存の方法について、これまでそれぞれの学問分野で別個のも

のとして扱われてきたことを示している（東京大学人文社会系研究科HP）。ジャンルについても、美術史・工芸史・考古学・建築史・景観史・文化財学・博物館学などがあり、内容も文化資源それ自体の発掘・保存事業から、教育・活用分野の人材育成まで、多岐にわたる（金沢大学国際文化資源学研究センターHP）。1996年に報告された文科省による「大学院の教育研究の質的向上に関する審議のまとめ（大学審議会・報告）」によれば、既存組織の見直しと新しい学問分野に対応した大学院の組織編制の多様化が問題とされており、（文部科学省HP）、既存の学部・研究科の枠組ではなく、それらを総合した横断的な研究科を設置することが必要なことがすでに示されていた。これまでは自分の専門の枠の中だけで物事を考えていればよかったが（中村 2011: 11）、もはや新たな研究段階に踏み出さなければならない。

この「文化資源学」の目的は、資料を資源に変えて利活用することである。日本学術振興会によると、現代に生まれた新しい文化資源を理解し、現代社会における文化資源の役割と活用方法を考えることによって、過去と現在の結びつきを学びつつ、未来を考えていくことを目指すという（日本学術振興会HP）。そして最終的には、「文化資源」を人類共有の財産とし、グローバル化する世界で人びとが異なる文化への理解を深め、互いに共生していくための基盤を作り出すことが求められる（国立民族学博物館文化資源研究センターHP）。人間が生み出した文化資料は、さまざまな形で世界中に存在している。現代の高度情報社会において、それらの文化資料を学術研究や人類文化の発展に有用な資源として活用すること、すなわち社会に還元することが必要である。その方法を理論的に究めていき、それを実践していく学問が「文化資源学」と言えるだろう。

3. 博物館

(1) 意識変化と分類

次に、日本の博物館がどのように変遷し、博物

館に対する意識もどのように変化してきたのかについて整理してみよう。博物館法第三条によれば、博物館の事業は「資料収集」・「資料展示」・「調査研究」・「教育普及」を軸にしたものであり、「その事業を行うに当っては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない」と明記されており、博物館が社会に対して文化資源を還元する職務を担っていることは明白である。

近年、社会のニーズが変化し、博物館学やその隣接科学の理論的研究が進むにつれて、理想とされる博物館の在り方が変わってきている（伊藤 1993）。1997年以來の3度にわたる博物館総合調査によると、教育普及活動に力を入れ、ボランティアの助力を受け、学校や地域団体との連携を強化するなどして、博物館が懸命に努力して変わってきている様子がうかがえる（日本博物館協会 2009: 131）。これまで中心的な事業だった「資料収集」・「資料展示」・「調査研究」から、「教育普及」に力点が移ってきていることがわかる（村野 2012: 35）。「教育普及」活動はもちろん、「資料展示」にも人の力が必要である。旧來の博物館は、資料すなわち「物」中心の立場で進めてきたが、「人」がおろそかになってはいけぬ（飯島 2004: 2）。博物館側の立場を主とせず、社会やそれを構成する「人」との関係を重視することが求められている。効率性や合理性だけを追求するのではなく、人間らしい知識あふれる創造生活の場を追求する博物館を時代は求めている。人々の知識生活をサポートする対人サービス機関が博物館の機能であり（諸岡 2003: 4-7, 18）、そのような考え方が浸透してきたことで、体験学習も増加してきたと考えられる。

(2) 博物館の分類

博物館は、その種類や設置者による形態、機能や条件、目的、時系列によって大きく4つの側面から分けることができるが、博物館の性格をもっともよく表すのは目的による分類である。伊藤に

よれば、目的別分類として、「地域志向型」、「中央志向型」、「観光志向型」の3つに分けることができる（伊藤 1993: 13-15）。

「地域志向型」博物館の目的は、地域に生活する人々のさまざまな課題に応えることである。地域の生活に基づいて教育内容を編成し、地域で生活する人々が自分たちでものを考え、組み立て、表現する能力を育成する教育観によって活動していく。継続的な学習の深まりや広がりに応える使命も意識している。一方「中央志向型」博物館の目的は、全国あるいは全県という広いカテゴリーで知識や成果を普及させることである。専門分野ごとに一般的で共通した法則に基づき、体系化された知識や技術を国民全体に広めていく。知識ある者を養成していこうとする教育観に立脚し、学習機会の提供と普及を中心に考えるのがこのタイプの博物館である。「観光型」博物館は文字通り観光的な効果を期待されており、来館者に対して継続的な学習活動は求めるわけではない。関心のある人々に対し、楽しんでもらうことが目的の博物館である。特殊性や意外性を課題とし、希少価値を重視した内容編成となっていて、来館者数が増加することが望まれるのである。ただ、実際の博物館は、展示の構成は「中央志向型」、教育事業の内容は「地域志向型」、入館者の層は「観光志向型」というように、3つの型が混在している場合が多く、博物館の性格が曖昧となりがちだと指摘されている（上掲書: 15-16）。なお、博物館を世代別に「第一世代」・「第二世代」・「第三世代」と分類することもある。このうち社会の要請によって資料を発見し、一般市民の参加・体験を通じて継続的に活用する「第三世代」は「地域志向型」に該当する。学芸員が来館者と共に活動して地域の課題を解決し、友の会やボランティア活動とも結びついて来館者が継続的に利用する面からも、「第三世代」は「地域志向型」に該当する（飯島 2004: 4-5）。体験学習などの教育普及活動に力を入れているのもこの型の博物館の特色であり、近年増加している。

表1 博物館と遺跡の一覧

番	場所	施設名	史跡形態	日常体験	体験学習	学校受入	出前授業	地域連携	キャラクター
1	北海道北見市	とほろ遺跡の館(森)	併設型						
2	青森県青森市	三内丸山遺跡	併設型	○	○	○		○	○
3	岩手県一戸町	御所野縄文博物館	併設型	○	○	○	○	○	○
4	岩手県平泉町	中尊寺(文化遺産センター)	併設型						△
5	秋田県鹿角市	大湯ストーンサークル館	併設型	△	○	○			
6	宮城県仙台市	地底の森ミュージアム	併設型	○	○	○			△
7	宮城県仙台市	仙台市博物館	単独型	○	○	○	△		
8	宮城県多賀城市	東北歴史博物館	単独型	△	○	○			
9	福島県会津若松市	福島県立博物館	単独型	○	○	○	○		
10	福島県下郷町	大内宿	併設型						
11	福島県猪苗代町	野口英世記念館	単独型		○	○			
12	福島県郡山市	大安場遺跡公園	併設型	○	○	○			
13	福島県白河市	まほろん	併設型				○	○	○
14	山形県天童市	西沼田遺跡公園	併設型	○	○	○			
15	栃木県日光市	東照宮	併設型			△			
16	群馬県渋川市	発掘情報館	単独型	○	○	○			△
17	群馬県高崎市	かみづつきの里博物館	併設型	○	○	○			
18	群馬県富岡市	富岡製糸場	併設型	○	○	○			
19	埼玉県行田市	さきたま史跡の博物館	併設型	○	○	○	○		○
20	千葉県船橋市	瓊ノ台史跡公園博物館	併設型				△		
21	千葉県千葉市	加賀利貝塚博物館	併設型	○	○	○			
22	茨城県水戸市	茨城県立歴史館	単独型	○	○	○	○		
23	東京都台東区	東京国立博物館	単独型						○
24	神奈川県横浜	横浜市歴史博物館	併設型	○	○	○			○
25	山梨県富沢市	釈迦堂遺跡博物館	併設型	○	○	○			
26	新潟県新潟市	新潟市歴史博物館	単独型	○	○	○			
27	新潟県長岡市	新潟県立歴史博物館	単独型	○	○	○			
28	新潟県糸魚川市	長者ヶ原考古館	併設型						
29	富山県富山市	富山市郷土博物館	併設型			○			
30	石川県金沢市	石川県立歴史博物館	単独型	○	○	○			
31	石川県能登町	真輪遺跡縄文館	公園型	○	△	○			
32	福井県福井市	一乗谷朝倉氏遺跡	併設型						○
33	福井県若狭町	若狭三方縄文博物館	公園型		○	○			△
34	長野県茅野市	長石縄文考古館	併設型	○	○	○	○	○	○
35	長野県長和町	黒瀬石体験ミュージアム	単独型	○	○	○			○
36	長野県富士見町	井戸尻考古館	併設型	△	○	○	○		△
37	長野県松本市	松本城・松本市立博物館	併設型	○	○	○			
38	静岡県静岡市	静岡市立發昌博物館	併設型	○	○	○			
39	愛知県名古屋	名古屋博物館	単独型	○	○	○			
40	岐阜県高山市	光ミュージアム	単独型	○	○	○		△	
41	岐阜県関市	岐阜県博物館	単独型	○	○	○			
42	三重県津市	三重県総合博物館	単独型				△		
43	京都府京都市	京都文化博物館	単独型		○	○			○
44	大阪府大阪市	大阪歴史博物館	単独型				△		
45	大阪府東大阪市	池上曾根野外学習館	併設型	○	○	○			
46	滋賀県彦根市	彦根城博物館	併設型	○	○	○			
47	奈良県明日香村	国営飛鳥歴史公園館	併設型	○	○	○			
48	和歌山県田辺市	和歌山県世界遺産センター	併設型						
49	兵庫県播磨町	兵庫県立考古博物館	併設型				△		
50	岡山県岡山市	岡山シテミュージアム	単独型	○	○	○			○
51	岡山県岡山市	岡山城	併設型	○	○	○			
52	広島県福山市	広島県立歴史博物館	単独型	○	○	○			
53	鳥取県大山町	チキムダ史跡公園	公園型						
54	島根県出雲市	常神谷史跡公園	併設型	○	○	○			
55	島根県出雲市	古代出雲歴史博物館	単独型	○	○	○			
56	山口県萩市	萩博物館	単独型	○	○	○	○		△
57	香川県高松市	香川県立ミュージアム	単独型	○	○	○			
58	徳島県徳島市	徳島県立博物館	単独型	○	○	○			
59	愛媛県西子市	愛媛県歴史文化博物館	単独型	○	○	○			
60	高知県南国市	高知県立歴史民俗資料館	単独型	○	○	○			
61	福岡県福岡市	九州国立博物館	単独型	○	○	○	△		
62	福岡県福岡市	板付遺跡公園	併設型	○	○	○			
63	佐賀県神埼市・吉野ヶ里町	吉野ヶ里歴史公園	公園型	○	○	○			○
64	長崎県志岐市	一支国博物館	単独型	○	○	○			
65	熊本県熊本市	熊本市立熊本博物館	単独型	○	○	○			
66	大分県国東市	安国寺集落遺跡公園	併設型	○	○	○			
67	宮崎県西都市	特別史跡公園西都原古墳群	公園型	○	○	○			
68	鹿児島県霧島市	上野原縄文の森	併設型	○	○	○			○
69	沖縄県那覇市	沖縄県立博物館	単独型	○	○	○			

註：表中の日常体験は後述する「常設型」、体験学習は「講座型」や「製作型」を指す。日常体験の△は職員がいれば実施できる条件付き、学校受入と出前授業の△は年間数件のみの場合、地域連携の△は年度によってはない場合を示している。なおキャラクターについては、パンフレット等にはないが館内に描かれている場合に△をつけた。

4. 博物館と遺跡

このように、博物館は目的によっても分類され

るが、その博物館を含めた遺跡公園については、世界遺産レベルのマネジメント研究はあっても、あまり議論されていない。そこで本論では、博物

館を含めた遺跡を、「単独型」、「併設型」、「公園型」という3つに分類したい(表1)。

(1) 単独型

このタイプは博物館のみ建設されている場合を指し、遺跡と併設されていない。本論では便宜上1つのタイプにまとめたが、展示品が一部のテーマに限定された博物館から多分野の資料を総合的に展示した博物館まで、その様態は多岐にわたる。例えば、野口英世博物館(福島県猪苗代町)は、2階展示室に博士ロボットがリアルに野口英世の紹介をしているが、それ以外は旧来の展示のみである。一方、東北歴史博物館(多賀城市)や福島県立博物館(会津若松市)は、総合展示室と特別展示室などに分け、テーマごとに非常に詳しい解説をしている。また、原寸大の大型模型が配置されているなど、来館者の興味を引くように工夫されている。このように、ある分野に特定する博物館から、地域色が強く地域的課題に取り組もうとする博物館、そして総合的な博物館まで含まれる。

(2) 併設型

このタイプは、博物館と遺跡が1つの敷地内に

ある施設もしくは互いに隣接する施設を指す。ただし、遺跡が主で小規模な博物館が建てられて「付属」している場合と、博物館の規模が大きく体験学習用の施設もあり遺跡と「一体化」している場合があるが、ここでは「一体化」している博物館を扱う。なお、「遺跡公園」や「史跡公園」という名称がつけられた施設であっても、遊具施設や直接遺跡とは関係のない施設が含まれていない場合は、「併設型」に含めて考えることにする。

三内丸山遺跡(青森市)は、紀元前3500~2000年の縄文時代の集落跡である。青森県営野球場を建設するため、1992年から開始された発掘調査によって、膨大な生活に関連した遺物や土偶などの祭祀遺物が出土し、巨大な集落跡が確認された。1994年に、直径約1mのクリの巨木を使った大型掘立柱建物跡が発見されると、それを契機に遺跡を保存しようという声が大きくなり、建設工事中止と遺跡の永久保存・活用が決定された。現在の遺跡公園には、南盛土の出土状況を覆い屋に入って見学させるほか、復元した竪穴住居・大型竪穴住居・高床式建物・大型掘立柱建物、そして大型掘立柱建物跡などを外部展示している(図1)。一方屋内施設については、2002年にビジターセンターとして「縄文時遊館」をオープンし、

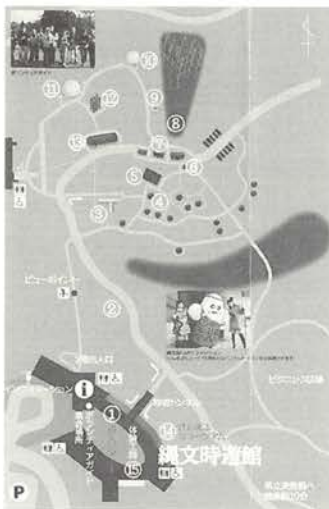


図1 三内丸山遺跡の案内図
(三内丸山遺跡パンフレット)



図2 さきたま古墳公園の案内図
(さきたま史跡の博物館館報)

2010年には「縄文時遊館」の「縄文ギャラリー」を改修して「さんまるミュージアム」が公開された。館内には、縄文時代を体験できる「縄文ギャラリー」や、映像で遺跡を紹介する「縄文シアター」などがある。三内丸山遺跡から出土した重要文化財をはじめとする遺物を展示している。また体験学習を重視しており、作業用スペースとして「体験工房」が設置されている。

さきたま古墳公園（埼玉県行田市）には、5世紀後半から7世紀初めにかけて造営された9基の古墳群がある。道路を隔てて、「さきたま史跡の博物館」側にある古墳は、瓦塚古墳・鉄砲山古墳・奥の山古墳・中の山古墳である。一方、道路の反対側にある古墳は、愛宕山古墳・丸墓山古墳・稲荷山古墳・將軍山古墳・二子山古墳である（図2）。丸墓山古墳は円墳としては日本最大で、主軸の長さが105m、高さが18.9mを誇っている。稲荷山古墳は、有名な稲荷山鉄剣が出土した古墳である。1983年に国宝指定され、「さきたま史跡の博物館」に実物が展示されている。將軍山古墳は、横穴式石室から馬具や環頭大刀などの副葬品が出土した古墳で、現在「將軍山古墳展示館」があり、石室の復元状況を見ることができる。二子山古墳は、武蔵国（埼玉・東京と神奈川の一部）では最大の前方後円墳で、主軸の長さは138mを測る。実際に丸墓山古墳と稲荷山古墳には上ることができ、市民に親しまれる公園となっている。なお、公園内には移築民家「旧遠藤家住宅」や埴輪製作の体験ができる「はにわの館」、レストハウスもある。2006年にリニューアルオープンした「さきたま史跡の博物館」は古墳公園内にあり、1階に「稲荷山古墳出土の金錯銘鉄剣」などを展示する国宝展示室と、埼玉県内の出土品を中心とした特別展が行われる企画展示室がある。1階には公開講座などで子どもたちが勾玉などを作る体験工房が、2階には公開講座や多人数での体験学習で利用する講堂がある。

(3) 公園型

集客目的で遊具など遺跡とは直接関係のない施

設が建設されているものを、観光重視の立場から「公園型」とする。真脇ポーレポーレ（石川県能都町）や若狭三方縄文博物館を中心とする縄文ロマンパーク（福井県若狭町）、特別史跡公園西都原古墳群（宮崎県西都市）は、同じ敷地内にアスレチック施設が併設されている大型公園である。なお、芝生などの憩いの空間やベンチなどの休息場所のみがある場合、遊具施設とはみなされないために本論では「併設型」に分類した。では、大規模で有名な遺跡である吉野ヶ里歴史公園（佐賀県神埼市・吉野ヶ里町）を「公園型」の典型的な事例として紹介する。

この歴史公園は、「弥生人の声が聞こえる」を基本テーマに、日本の優れた文化的資産である吉野ヶ里遺跡の保存と、当時の施設の復元や発掘物の展示などを通じて、弥生時代を体感できる場を創出し、日本はもとより世界への情報発信の拠点とすることを目的に作られた（吉野ヶ里歴史公園HP）。国営公園区域の周辺に佐賀県の公園区域を設け、国と県が一体となった歴史公園として、2001年からその一部が開園し、徐々に拡大・整備されて現在に至っている。この公園の基本方針の1つにリクレーション環境の整備もうたわれており、典型的な「公園型」施設と言える。

この歴史公園は遺跡を保存・活用するために作られた施設で、弥生時代のものとしては日本最大である。紀元前3世紀から紀元後3世紀までの弥生時代を大きく前期・中期・後期に分けると、前期は周辺の小規模な農村の上に位置する初期集落、中期は居住域と倉庫域が区別された環濠集落が形成された可能性がある。そして後期になると、物見櫓を備え、大型祭殿のある祭祀の場や、内環濠によって囲まれた大型の環濠集落をもつ「クニ」へと発展したと考えられる。甕棺が出土したほか、有柄銅剣やガラス製管玉等の出土品は国の重要文化財に指定されている。

その吉野ヶ里遺跡を中心とした歴史公園は大きく、入口ゾーン、環濠集落ゾーン、古代の森ゾーン、古代の原ゾーンから構成されている（図3）。入口ゾーンには、ガイダンスルームやミニシア

ターなどが含まれる歴史公園センターがあり、公園や遺跡の歴史を学ぶ映像を見ることができ、公園の案内や情報提供をしている。

環濠集落ゾーンには、遺物を公開した「展示室」や「弥生くらし館」など、他の遺跡公園でいう博物館施設があり、もっとも見どころが多い。「弥生くらし館」は、最大300人を受け入れられる体験工房を備え、土器復元作業を見学できる公開作業室や映像室などがある。そこでは、「火おこし」・「土笛づくり」・「勾玉づくり」などのものづくり体験を毎日行うことができる。「南のムラ」では、土日に「鏡製作体験」・「親魏倭王印製作体験」・「銅鐸製作体験」・「貨泉製作体験」などの体験プログラムもある。また、佐賀県教育委員会が行う発掘現場を直接見学することもできる。

古代の森ゾーンには、弥生時代の森に近い植生を再現した「古代植物の森」、この森から出土した約1000基のうち約500基の墓列が復元されている全長約300mの「甕棺墓列」、弥生時代の森と人との関わりをテーマとした植物の展示や体験プログラムができる「古代植物館」がある。

一方、国の史跡指定を受けていない区域は、佐賀県が管理する古代の原ゾーン（図3の左部分）となっており、「祭りの広場」、「市の広場」、「弥生の大野」、「復元水田」、「遊びの原」、「野外炊事コーナー」から成っている。毎年秋に開催されている吉野ヶ里アニメ祭りは、「市の広場」で行われている。また「遊びの原」には、物見槽風の展望台やローラー滑り台、アスレチック、トランポリン、ふわふわドームなど10種類の遊具があり、家族で楽しめる施設となっている。

このような「公園型」は、観光資源として重要であり、財源さえあれば今後増えていくことも予想される。しかし、本来遺跡は文化・歴史を学ぶべき文化資源であり、集客を優先してアスレチック施設やイベント会場として開発することに対しては抵抗を感じる。楽しさを追求するのは、あくまでも遺跡そのものから発せられる魅力作りが前提であり、まったく関係のない要素を遺跡公園に取り入れるのは問題がある。やはり、教育普及の面から一般市民への還元を考えていくべきだろう。



図3 吉野ヶ里歴史公園の案内図（吉野ヶ里歴史公園パンフレット）

表2 教育普及活動の実施割合

(日本博物館協会 2009 図表-16 より作成)

項目	1997	2004	2008
講座	32.3	38.4	40.5
講演会・シンポジウム	39.6	43.9	46.4
体験学習	31.8	41.2	43.7
出前授業	7.0	12.0	12.5



図4 埼玉県章

5. 博物館の体験学習

先述したように、博物館による一般市民への還元が必要だという認識は徐々に高まっている。日本全国の博物館の傾向を見ても、教育普及活動に力を入れている館は増加しており、明らかに博物館の業務が変わってきている（日本博物館協会 2009: 15-16）。教育普及活動の1つである体験学習は、実際に道具を作る素材に触れたり、直接自らが製作したりしながら、楽しみながら知識を確認していく学習方法である。体験学習の実施率も、講座・講演会同様に増加の傾向にある（表2）。1997年と2004年を比較すると、10%近くの伸びがあるところが目をひく。伊藤によると、専用の部屋を用意して常時指導員がついて学習させる「常設型」、期間と対象を限定して学習目標を設定する「講座型」、そして対象を製作の難しいものに限定し、素材の収集も含めて道具を製作し、当時の人々の技術や生活を学習する「製作型」がある（伊藤 1993: 120-121）。この伊藤分類に則って、それぞれの具体例を見ていこう。

(1) 常設型

尖石縄文考古館（長野県茅野市）では、子どもたちが遊び感覚で学べるスペース「体験コーナー」がある。メニューは縄文のもよう、アンギンを編んでみよう、木の実をわる、縄文のうす、刃を研ぐ、火をおこす、縄文パズルである。模型であっても気軽に自分の手に取って古代で使われていた道具に関心を持たせる工夫は、この館に限らず、多くの博物館で認められる。また、子どもたちも大人も楽しめる「縄文体験」もある。受付に「縄文体験」の案内があり、来館者が予約せずに制作できる。館の奥に「学習コーナー」が作業用に設

けられており、材料費や窯焼き代などを支払い、縄文土器や土鈴、土笛などを作ることができる。一方、予約して参加するものとして「縄文教室」という体験講座がある。初心者向けに、①縄文土器、②ビーナス・女神、③縄文風きんちゃく袋、④つるでカゴ、⑤黒曜石のやじり、の全5回実施している。①の土器と②の土偶は、後日開催する「縄文まつり」で野焼きすることになる。

さきたま史跡の博物館で行われている「古代体験」は、火おこしに挑戦、古代人に変身、古代の布作り、土器を作ろう、古代の装身具を作ろう、土鈴・土笛を作ろう、古代の装身具を作ろう、古代米を食べようなどである。やはり専用に体験学習用の部屋が設けられており、特に埼玉県章にもなっている勾玉作りが人気である（図4）。2013年度からは、新たに土偶作りと貝輪作りの体験講座を追加した。

新潟市歴史博物館の「たいけんのひろば」では、「作る・さわる・調べる」の3つを柱に子どもたちに空間を提供している。火おこしをさせたり石器でものを切ったりさせ、道具を実際に使用させることによって当時の生活を体験させようとしている。

(2) 講座型

三内丸山遺跡の縄文時遊館には、体験学習用の、広い「体験工房」が設けられている。「常設型」もあるが、「講座型」の体験学習が充実している。個人向けと団体向けの体験学習が用意されているのも、普及教育活動に力を入れている三内丸山遺跡ならではの点である。「さんまる縄文体験」は、発掘調査の成果などから考えられる当時の生活の一部を体験するコーナーで、1回コースと2回コースに

分かれている。1回コースは、矢じりの製作（弓矢を使用する）、イノシシの骨でぬい針を製作（刺繍する）、縄文土器の着色、発掘体験、土偶のレプリカ製作、岩偶と石のペンダントを滑石で製作、鹿の角で釣り針を製作（釣り針で魚釣り）、木の実の調理（殻むき、粉碎、煮、アク抜き）などがある。2回コースは「縄文土器と板状土偶を作ろう」で、製作と野焼きの2回セットである。これらのメニューの多くが製作にとどまらず使用までを考えており、実質的も「体験学習」に近いものである。

東北歴史博物館（多賀城市）では、実際の体験を通して歴史や文化に触れ、歴史に関心を持たせることを目的に、2011年度において夏期と冬期の土曜日に1日2コースを設定し、計16コースを実施した。人気の高かったコースは、弓矢で獲物を狙おう、丸木舟をこいでみよう、砂金で一攫千金、サトウダイコンから砂糖を作ろう、などであった（東北歴史博物館 2013）。

（3）製作型

三内丸山遺跡では、2012年度に引き続き、実際に家づくりを体験してもらう「さんまるムラづくり体験」を実施している。前述した「さんまる縄文講座」①～⑤を受けることを原則として、竪穴式住居づくりを体験できる。家づくり体験のメニューは、①復元住居の現状観察及び解体、②家の材料加工・材料準備、③家の軸組の組み立て、④家の屋根を葺く1（下地茅葺き）、⑤家の屋根を葺く2（土葺き）、⑥完成仕上げ、と約4か月の長丁場である。この「さんまるムラづくり体験」を終えると、「さんまる縄文人認証」が送られる。参加者の感想は紙面の関係上省くが、作り上げた充実感と家づくりの苦勞が体験できたと、非常に好評である（三内丸山遺跡保存活用推進室HP）。

井戸尻考古館（長野県富士見町）では、2008年に小学6年生を対象に土器作りを体験させた。土器について概説した後、土器の生地づくりから整形、野焼きまでを行った。生地づくりは不純物除去・混ぜ・練り・水分調節などうまくいかなか

たが、苦勞の末に土器を完成させた。工程は約5か月に及んだ。忍耐強く作業をするという教育的見地からも、土器づくりを文字通り「体験」するという考古学的理解の面からも、非常に意義ある体験学習だったという（小松からの私信 2013）。

夏休みや連休には、宿泊を伴った「体験学習」が各地で行われている。名古屋市の歴史の里（整備事業予定地）の志段味古墳村では、小学生を含む家族・グループを対象に、古代の生活を体験する「古代人なりきり宿泊体験」を開催した。一泊二日で宿泊し、火おこし体験やイノシシ狩り、古代米の食事、埴輪作りなどの体験を通じて、「歴史の里」整備事業への理解を深めることが目的であった（名古屋市HP）。また、吉野ヶ里歴史公園では、小学生以上の親子を対象に、毎年秋に「竪穴住居での宿泊体験」が実施されている。竹での食器作りや土器を使った食事作り、古代米の稲刈り体験など、弥生時代の生活体験ができるという。尼崎市立田能資料館でも、弥生時代の生活を体験する「宿泊体験 復元住居に泊まろう」という体験学習会が10月に実施される。事前学習会に参加することを条件に、高床倉庫の中に入って食料を運び出したり、火をおこして、復元土器などで弥生時代の調理を行ったりする。また夜は勾玉を作り、復元住居で一夜を過ごすというプログラムである（尼崎市HP）。

最近はどこも「体験学習」と銘打って、手軽に作れる魅力的なメニューを用意しており、毎日できる施設も多い。ただし趣味や遊びのためにだけ、土器や装飾品を作ることは避けなければならない。前述したように本来「体験学習」と呼べるものは、伊藤分類の「製作型」の学習であり、短時間で製作でき材料もすべてそろっている学習を「体験学習」と表現していいのか疑問である。あまりにも「体験学習」という名称が安易に使われ過ぎであろう。また、「宿泊体験」は、古代人の生活を「食」「住」部分で実感できる催しだが、一部では高額な参加料が必要だったり、いたずらに関心を刺激したりする「観光的」なものも見受けられる。学芸員（職員）が何を学習し、何を目的と

するのかを参加者に理解させたいうえで、博物館が意欲的に普及教育活動を進め、参加者が学習意欲を高めて自主的に研究するよう道筋を立てることが、真の「体験学習」であろう。そのことが、博物館によって将来の社会・文化の担い手を育成することになる。

6. 文化資源を利用した町づくり

(1) 萩のまちじゅう博物館

山口県の萩市は多くの文化的遺産を有しており、町全体を博物館と考える「まちじゅう博物館構想」を実践しているユニークな都市である。2003年に「萩まちじゅう博物館整備検討委員会」を設置し、翌年に萩開府400周年を記念して「まちじゅう博物館条例」を施行した。基本構想は、萩の歴史を再発見して都市遺産を守っていくこと、萩博物館を中心に「萩学」を探求すること、そして観光資源・インフラの整備を進めることが軸である。毛利輝元が1604年に開府して以来約260年間、長州藩36万石の城下町として栄えた萩は、萩城跡をはじめ、菊屋家住宅が残る菊屋横丁などの城下町、萩で活躍した木戸孝允の旧宅や高杉晋作の生家、吉田松陰を祭る松陰神社など、城下町が都市遺産となって今日まで継承されている。その中核を担う萩博物館は、それまであった萩市郷土博物館を改築・移転する形で、大野毛利家の屋敷跡に2004年に建設された。博物館の造りは武家屋敷風で、萩の自然や歴史、民俗、文化など「萩学」を学ぶ拠点である。萩の町を歩いて観光する前に、この館で見どころと歴史的背景を把握すると、「まちじゅう博物館」を満喫できる（萩博物館HP）。

貴重な都市遺産を舞台として、市民が自分の町に誇りを持ち、客を迎え入れてもてなす体制を整えることが萩の新たな魅力ある観光地づくりの鍵となる。それを実現するために、市民と市が一体となって保存に取り組み、賛同者の輪を広げてその信託によって土地や建物などの保全・保存・修復などを進めている。取り組んだ事業の例とし

て、「語り部育成事業」と「筋名復活事業」がある。2012年に行った「語り部育成事業」では、萩ものしり博士検定で博士課程に合格された萩ものしり博士に呼びかけ、萩の豊かな歴史、文化、自然について語れる人を育成するために「語り部育成講座」を開催し、14名が10ヶ月間の講座を修了した。また「筋名復活事業」とは、様々な由来を持った通りの名称「筋名」を復活する事業である。約250の「筋名」が確認されており、道路57か所に筋名の入ったブロンズ製プレートを埋め込んだり、浜崎地区の側溝7か所と川島地区の側溝4か所に筋名入りグレーチングを設置したりした。地元住民に萩の歴史と誇りを再認識させ、萩を訪れた人々には城下町の風情や情緒を感じさせることが目的である（萩市まちじゅう博物館・世界遺産推進課HP）。

(2) 茅野市「縄文プロジェクト構想」

茅野市が推進しているこの構想は、行政が縄文文化を町づくりの基礎にする方策であり、文化資源の活用の典型である。この構想の副題は「一茅野市民プランのより力強い推進に向けて一」であり、「縄文プロジェクト構想」の冊子に次のように書かれている（茅野市・茅野市教育委員会 2010）。

茅野市の魅力 それは、雄大な自然、八ヶ岳の眺望、明るい空気…
そして、その自然に育まれた類稀なる縄文文化
「縄文」の価値を考古学の世界だけにとどめず
私達の生活の中で普遍性を持たせる取り組み
茅野市の「宝」を磨き、育てる取り組み

茅野市が目指す将来像は「人も自然も元気で豊か、躍動する高原都市」であり、市民プランのより力強い推進に向け、茅野市の個性・独自性の原型であり、かつ、茅野市が世界に誇る縄文文化を



写真1 橋の欄干



写真2 壁面リリーフ

意識したまちづくりを推進し、「縄文」を活かしたまちづくりを目指している（茅野市：縄文プロジェクト構想についてHP）。すべての茅野市民が、自分たちが住んでいる地に、国の象徴的な文化財が多数存在している事実を知り、その文化財の価値や意義を正しく理解することが必要だとし、最低のことは自分たちで説明できる「市民総学芸員化」を目標としている。そのために、地元の縄文文化を町の様々なところに取り付け、あるいはシンボル化する取り組みを推進している。

例えば、土偶「縄文のビーナス」が出土した棚畑遺跡につながる道路にかかる菅沢橋の欄干には、「縄文のビーナス」の彫刻があり、道路沿いの壁面には縄文土器のリリーフが4枚製作されている。

そのほかにも、茅野市役所玄関にある縄文土器の滝は、市内の下ノ原遺跡から出土した土器をモチーフに製作された。また、JR茅野駅の改札口を出ると、「ようこそこのへ 国宝のある街 日本最古の国宝『土偶』愛称 縄文のビーナス」の看板がある。ホームには、八ヶ岳山麓に露頭している黒曜石を展示している。尖石縄文交番は、尖石遺跡に近いことから竪穴住居をイメージして建設された。このように縄文文化をイメージしたデ

ザインが、各所で認められる。

2013年9～10月に街路灯に「ビーナス」や「仮面の女神」のついたフラッグを掲示し、街中のにぎわいを創出するとともに、茅野市の縄文文化を発信した。この企画は茅野市商工課が茅野市振興ビジョンとの連携事業として行っており、茅野市が「縄文プロジェクト構想」を推進していくことにより、自分たちの地に貴重な歴史的・文化資源があることを意識することになる。

地元と密着して遺跡公園や博物館を運用・活用していくことは、地域アイデンティティの形成にもつながる。そのモデルともなる事例が、「萩まちじゅう博物館構想」と茅野市の「縄文プロジェクト構想」である。双方とも自分たちの町の魅力を市民が再発見するとともに、貴重な文化資源を守り育てながら、誇りをもって次世代に伝えていこうと取り組んでいる。

7. 博物館・遺跡公園の地域への還元

本章では、2013年夏に訪問した博物館や遺跡公園を中心に事例を分析し、文化資源の活用と社会還元について、現時点での考察を試みたい。

(1) 地域イベントの活用

集客のための方策の1つに、地域のイベントや祭りがあげられる。遺跡の歴史的イメージを利用したイベントによって、地域との結びつきをはかろうとする事例は、年々増える傾向にある。

さきたま史跡の博物館では、地元の行田市「世界遺産サポーターの会」が中心となって、さきたま古墳群のユネスコ世界遺産登録に向けた取り組みを行っている。そこで館側では、年数回の世界遺産関連講座を実施し、地域に貢献している。また、地域行事の「さきたま火祭り」や「さきたま秋祭り」に対し、公園内の使用許可や博物館の開館時間の延長などにより協力体制をしいている。特に「さきたま秋祭り」では、火おこしや勾玉作りを実施し、県民記念行事をサポートしている（辻による私信 2013）。

尖石縄文博物館では、市民の祭りとして定着しつつある「縄文まつり」を、尖石史跡公園で毎年開催している。縄文文化を食し、縄文太鼓による演奏を楽しみ、火起こしして土器を野焼きするなど、一般市民はイベントを通じて縄文文化を体験できる。また、茅野市教育委員会からの依頼で、2008年度から「縄文文化月間」を設定している。9～10月にかけて、特定の日には考古館や康耀堂美術館を無料開放し、尖石関連の映画を上映したり、縄文検定を行ったり、公民館講座や縄文文化大学講座を開いたりしている。前述の「縄文まつり」もこの「縄文文化月間」に実施し、縄文考古館を市民との交流の場として提供している。また、後述する自主サークルに場所を提供し、アドバイスを与えることが、地域住民との交流を促進していることにもなる（山科による私信 2013）。

特別史跡公園西都原古墳群（宮崎県）は、円墳・方墳・前方後円墳など311基の古墳の一部を公園化し、毎年11月に「西都古墳まつり」を開催している。古代衣装をまとった参加者が手にたいまつを持って行列を作って歩く「たいまつ行列」や、公園内の御陵墓前広場で大きな火を燃やし、古代衣装の若者たちが神話をテーマにした舞を披露する「炎の祭典」によって、古代神話をほうふつとさせる幻想的な光景を作り上げる（宮崎県商工観光労働部観光交流推進局HP）。また、奉納行事として郷土芸能や神楽、ステージイベント、子どもたちの古代生活体験コーナーなどの催しもあり、子どもから大人まで一般市民も参加できる「西都古墳まつり」は、遺跡公園が地域の活性化に一役買っている典型である。

こうした地域イベントを共有することによって地域との連携を深めることは、そのこと自体で住民への還元を実行していることになる。ただし、地域イベントは「楽しい」という感想は多く出ても、「新たな発見」や「文化資源の学習」に結びつかないことも多い。筆者のアンケートによれば、地域イベントへの参加者のコメントは、リクリエーションと捉えているものが大半である。集客には利用できても、もっとも大切なその後の遺跡

や歴史の重要性にアプローチさせられない状況が浮き彫りとなっている。博物館や遺跡公園の管理者や専門分野の研究者が、社会への還元への方策について考え、訪問者を増やすことに終始した祭りとならないように知恵を絞る必要がある。そういう意味で、三内丸山遺跡で実施されている「さんまるムラづくり体験」は、遺跡の重要性を知り当時の生活を考える機会を与える面でも文化資源の活用の有効なモデルと言える。筆者が実施したアンケート結果でも、いかに竪穴住居を建てるのが難しいかを実感し、縄文時代の技術の高さと住民同士の協力が必要かを理解できたことがうかがえ、文字通りの文化資源を考える「体験学習」となったようである。

(2) ボランティア活動

ボランティア活動は、博物館と地域のつながりを強くすると同時に、生涯学習として博物館が地域住民に還元する意味で非常に意義深い。「三内丸山応援隊」は1995年に55名で発足し（三内丸山応援隊 1998）、現在ではのべ96名がガイド部と体験部に分かれて遺跡公園の運営を手伝っている。ボランティアによる遺跡公園ガイドは、毎日午前4回、午後4回実施している。指定の集合場所に集まれば、無料で約1時間かけて案内する。主なコースは、環状配石墓→南盛土→復元竪穴住居→復元高床式建物→土坑墓→北の谷→北盛土→子どもの墓（埋設土器）→大型掘立柱建物跡→復元大型掘立柱建物→復元大型竪穴住居、である。一方「三内丸山応援隊」主催の「体験学習」は、予約なしで毎日開催しており、予約なし参加できる。材料費などは有料であるが、安価で時間もさほどかからない。縄文ポシェット作り、編布作り、板状土偶作り、再生琥珀のペンダント作り、まが玉作り、ミニ土偶作り、組みひも作りが可能で、体験工房を使って製作する。ガイド部・体験部以外の職務は、応援隊が運営するミュージアムショップにおける販売、遺跡における各種講演会、シンポジウム等への参画及び支援、遺跡の広報、維持管理に関する助言及び協力などである。

地底の森ミュージアム（仙台市）も、非常にボランティア活動が活発である。1996年にこの館が開館してから、近隣の住民たちが中心となって組織された。現在55名が登録されており、体験講座の石器作りの補助、展示解説、イベントの補佐などを行っている。1年間の市民文化財研究員を経て、ボランティア員になる場合もある。しかしこれとは別に、1997年に友の会も発足した。自主的に講演会や史跡巡りを行い、知識を深めるとともに博物館活動の普及にあたっている。2011年3月現在で個人会員29名、家族会員7家族、賛助会員1団体で、ボランティアを兼任している者もいる。（仙台市富沢遺跡保存館 2012）。三内丸山遺跡と同様、博物館の運営にはなくてはならない存在となっている。

さきたま史跡の博物館のボランティアへの登録数は、2013年度は32名であり、登録するためには前年度に古代体験や展示解説などの研修に4回参加する義務がある。登録後も、地域の古墳見学など年3回の知識向上のための研修に参加する。ボランティアの活動内容は、体験講座の補助、展示解説、公園内の環境整備などである。展示解説は、土日・祝日に来館者に対し行っている。なお、博物館外のさきたま古墳群では、博物館のボランティア員ではなく、行田市観光協会に属する「行田観光ボランティア会」が観光ガイドを行っている。5人以上の団体であれば、2週間前までに予約が必要だが無料で案内している（行田市観光協会HP）。それぞれ団体は異なるが、一般市民が自分たちの文化資源の価値を伝える意味では同じである。

尖石縄文博物館では、ボランティア員が12名と少ないものの、考古館の活動を支援する市民グループで、考古館職員と協働して考古館の展示解説や史跡公園の整備と活用などの活動を進めている。活動テーマに応じたグループに登録することができ、活動の舞台となる考古館と史跡公園について学芸員が説明し、実際の業務に携わっている。「語り部の会」は展示解説ボランティアで、現在4名が登録している。これまで重ねてきた縄

文文化についての学習を活かし、茅野市から発掘された遺物を来館者の目線で、基本的に土・日・祝日に展示解説をしている。会員相互の情報交換なども行っているほか、他館のボランティアとの訪問交流もしている（山科による私信 2013）。「みずならの会」は史跡公園整備ボランティアで、現在8名が登録している。縄文時代の植生を復元するために、コナラやミズナラをプランターで栽培し、苗木を大きくしてから移植して増やす取り組みをしている。同時に西洋タンポポなどの外来種の植物を除去し、立枯れの木を伐採するなどの活動を行っている。なお、他の博物館でよく見られる「友の会」は存在せず、現在4つのサークルが考古館や史跡公園、青少年自然の森を活動の場として活動している。もっとも規模の大きい「縄文土器サークル」をはじめ、「尖石縄文編布の会」、「尖石自然観察クラブ」、「文化史跡探訪会」、「日本列島人類の旅」、「土器楽会」がある（尖石縄文考古館HP）。

このようなボランティアは、資金的な問題を抱える博物館に対して無報酬もしくは安価な補佐役を果たしている。しかしそれだけでなく、ボランティア員は自分たちの生涯学習のために博物館や遺跡公園に通っている。また、地域住民と施設をつなぐ象徴的な存在としても位置づけられている。入館者にとって気軽にわかりやすい説明は好評で、リピーターになる地域住民も多いことが筆者のアンケートで明らかになっている。また、解説・説明といった「語り」があることにより、入館者の体験の質・印象が向上することも報告されている（中谷 2013: 26）。つまり、彼らボランティア員の活発な活動が自分たちのみならず訪問者の生涯学習をも支援することにつながり、一般市民と文化資源を結ぶことに大きく貢献しているのである。このことが、文化資源の社会への還元となっている。

しかし問題点としては、ボランティア員の中には自分の知識を入館者に何でも教えたい人が見られることである。入館者の要望を考えずに、自分の知識を押しつけて自己満足する場合もある（飯

島 2004: 10)。実際、筆者が勤務している高校で博物館見学会を催した際、筆者による展示物の説明を疎ましそうに見ていたボランティア員もいた。また、ある館ではビデオ上映している際、そのビデオが解説なしであったこともあり、ボランティア員がずっと解説を加えていた例もあった。個人的な思いを控え、文化資源の重要性を理解してもらう姿勢に解説員として徹することも必要であろう。

(3) 文化資源教育

博物館や遺跡公園に足を運んでもらうことは、文化資源に親しんでもらうための大前提であり、楽しくわかりやすい学びの場を提供することは重要である。しかし、さらに追求したいのは、文化資源の価値を訪問者に理解してもらうことである。文化資源を教育することは、若い世代が成長したとき、将来的に専門家と同じ視点で文化資源を捉える姿勢にもつながるだろう。そのために有用なのが、身近な遺跡や博物館で地元の歴史の素晴らしさを学ぶことに効果的な「体験学習」である。長野県長和町の黒耀石体験ミュージアムも、その名称に「体験」を冠していることからわかるように、体験学習することを前提に建てられた施設である。群馬県の発掘情報館も、多くの子供たちに体験学習の場を提供している。石器製作の材料に地元が産地である黒耀石を使ったり、県章にもなっている勾玉を製作したりすることは、より身近に石器や装身具を感じることだろう。もちろん、前述の通り「体験学習」の内容については、参加者に「製作型」のような真の体験をしてもらうように吟味すべきである。

さらに最近増加傾向にあるのが、検定試験である。三内丸山遺跡では、「じょうもん検定」が2010年から行われている。この検定は、縄文時代に関する文化・環境・生活などの知識を学ぶことで、その価値と魅力を積極的に伝えられる人材の育成を目的としている。また、「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」の世界遺産登録に向け、民間レベルでも推進気運を盛り上げることも、この検

定が目指すところである。尖石縄文考古館でも、「尖石縄文検定」が2011年から開始されている。初級・中級・上級の試験があり、茅野市教育委員会が進めている市民総学芸員化という「縄文プロジェクト構想」の一環として、広報員へのステップとすべく実施している。2013年8月には、初級・中級の検定に合格した6名が、2回にわたる事前学習を経て、初の展示解説を行った(長野日報 2013)。ボランティアの解説員として、今後活躍することが期待される。萩博物館でも、「萩ものしり博士検定」が実施されている。萩の豊かな自然や歴史・文化の資源について知識を得ることで萩の文化資源を再発見し、「萩まちじゅう博物館」構想に賛同し、参加するきっかけにしてもらうことも目的である。修士検定は2005年、博士検定は2006年、そしてこどもものしり博士検定は2008年から始められている。子どもものしり博士については、2012年度からは萩市内の小学校5・6年生がふるさと学習の一環として検定にチャレンジしている。検定合格者の特典としては、認定証の授与、認定バッジの進呈、「萩まちじゅう博物館まちかど解説員」への任命、解説員証(萩博物館永久パスポート)の進呈、修士博士限定特別講演会への出席、特産品を味わうツアーや史跡めぐりなどの企画・参加、などがある。そして、「語り部育成事業」で講座を受けた博士たちが、萩の観光客に志を持ってストーリーを語ることが期待されている。

文化資源教育をする中心は、確かに専門家である。しかし、体験学習を通じて知識や技術を得た一般市民が、自分たちの側から文化資源の面白さや重要性を発信すれば、一方通行の教育的アプローチから脱することができる。同様に検定試験に合格した一般市民が、自分たちの町の素晴らしさを語り、文化資源の意義を広めていければ、専門家と一般市民の双方から文化資源の活用を実践することが可能となる。単なる博物館における展示だけでなく、「対人サービス」や「語り」を利用した「草の根の文化資源教育」を進めていくことが今後重要になっていくことは言うまでもない。

8. おわりに

本論では、遺跡公園と一体化した「併設型」博物館が増加し、体験学習を含めた教育普及活動に力を入れる施設が多くなってきていることを述べてきた。表1でも明らかのように、筆者が調査した博物館では、2012年現在で「常設型」または「講座型」の体験学習を実施している施設は8割以上であった。また、博物館や遺跡公園側から一方通行的なアプローチをするのではなく、イベント開催やボランティア活動、体験学習や検定試験を通じて地域との関わりを積極的に持つことの重要性を指摘した。そして、博物館や遺跡公園を地域アイデンティティ育成に利用することで町づくりを推進する事例は、文化資源を社会に還元する方策として有効であることを確認した。

博物館や遺跡公園を身近に感じさせるために、最近ではマスコットキャラクターを作成することが増えている。観光面からマスコットを商品化するメリットがあると同時に、知名度も高まることが期待される。また公募でマスコットや名称を決定することも多く、地域で愛着が出てくる意味でも効果がある。三内丸山遺跡のマスコットキャラクター「さんまる」は、三内丸山遺跡出土の板状土偶を模して作られ、縄文時代の服を着用している(図5)。服に見られる文様も、縄文土器に掘られているものをモチーフにしている。茅野市にある株式会社アルピコ交通では、主に65歳以上の高齢者や障害のある人の福祉バスのボディや停留所に、マスコットキャラクター「ビーナちゃん」が描かれている(写真3)。前述したように、茅野市

は「縄文プロジェクト構想」による町づくりを進めており、土偶ビーナスを模したキャラクターで縄文の町をイメージしている。ここ数年「ゆるキャラ」ブームであるが、単なるブーム便乗ではなく、地域アイデンティティと関連するようなシンボルマークやキャラクターを作ることは、文化資源の広報的アプローチ及び公募による宣伝費の削減策としても有効であろう。

ただし「観光資源」として利用される文化資源が、弊害をもたらしている「観光公害」の事例もある。三重県の伊勢市宇治も、商店街の商品陳列場所や過度の呼び込みなど、経済的動機による町づくりが進んでしまっている。この状況は、本来の地域性豊かな町づくりから離れてしまい、いずれ観光客が離れていくのではないかという不安の声もある(土生田 2008: 6-7, 14)。また、1995年にユネスコ世界遺産に登録された白川郷も、狭い道に観光バスやマイカーが殺到し、住民が車で外出できないほどの交通渋滞に陥っている(佐滝 2009: 206)。また、保存に関する問題も指摘できる。三内丸山遺跡は、遺跡公園を魅力あるものにすることで集客に成功した例だが、掘立柱建物や竪穴住居跡などの大型建造物を復元することは、「真正性」の追求と表裏の関係にある。遺跡公園は「真正性」を保ちつつ、観光客の期待を裏切らないような方策が必要となる。訪問者に強いインパクトを与え、彼らの想像力を十分刺激することで満足感を与えることが観光資源として成功する(杓谷 2004)、文化面とのバランスが重要となる。

最後に、今後研究を進めていく上での課題に言



図5 さんまる(三内丸山遺跡マスコット)



写真3 ビーナちゃん(アルピコ交通マスコット)

及しておく。本論で取り上げた博物館や遺跡公園には、実際に訪問・調査していない施設も含まれている。表1にあっても本文では触れていない施設については、年報などの出版物を参考にしながら、実際に現地調査することで教育普及活動や遺跡公園の実態を把握することが必要である。また、今回は文化資源側からの視点で論じてきたが、現在回収中の来館者用とボランティア会員に対するアンケートを分析すれば、管理・運営側と利用者側の考え方や捉え方にどのようなずれがあるのか、明確になるであろう。研究者が観光客を含めた一般市民に知識を普及させるために必要・有効であると考えたものが、地元住民や自治体に本当に意味があるのかを、分析しなければならない。つまり、複数の立場の人々がそれぞれどのような価値観からその文化資源を見ているかを探究する必要がある。遺跡の価値は経済的利益だけで決定されるわけではなく(澤村 2011: 112)、観光面と同時に教育普及面として文化資源が活用されるように考えていくべきである。

筆者にとって、マヤ文明遺跡における文化資源の社会的還元が、最終的な追究すべきテーマとなる。本論で述べてきた日本における文化資源の社会への還元方法が、経済力の乏しいマヤ地域の文化資源に適用あるいは応用できるのかを模索していきたい。日本ではご当地マスコットキャラクターが商品開発されているが、金銭をかけずにキャラクターやシンボルマークを募集し、学校等に掲示するだけでも文化資源の広報的効果があると思われる。また、管理者側と利用者側、研究者側と一般市民側、及び観光面と教育面といった対極をなす複数の視点で、文化資源を利活用する方法を考えていきたい。

謝辞

中米における現地調査やJICA研修等でお忙しい中、指導主任の中村誠一先生には有益なご指導をいただいた。また博物館訪問に際して、以下の方々が施設見学やインタビューにご協力くださっ

た。末筆ながら記して感謝申し上げたい(敬称略)。

永嶋豊・岩田安之(三内丸山遺跡)、佐藤祐輔(地底の森ミュージアム)、田中敏(福島県立博物館)、佐藤義孝(大内宿観光協会)、辻謙治(さきたま史跡の博物館)、小島敦子(群馬県埋蔵文化財調査事業団)、山科哲(尖石縄文考古館)、小松隆史(井戸尻考古館)、木村一貫(新潟市歴史博物館)、新出直典(真脇遺跡縄文館)。

【参考文献】

- 飯島康夫：2004「博物館におけるボランティア活動」『博物館ボランティア養成セミナー記録集』1～10頁。新潟大学旭町学術資料展示館。
- 伊藤寿朗：1993『市民のなかの博物館』、吉川弘文館。
- 木下直之：2004「文化資源学の現状と課題」『文化経済学』第7号、5～13頁。文化経済学会。
- 佐滝剛弘：2009『「世界遺産」の真実—過剰な期待、大いなる誤解』、祥伝社新書。
- 澤村 明：2011『遺跡と観光』市民の考古学8、同成社。
- 三内丸山応援隊：1998『SPIRIT 遺跡ボランティアとして』
- 杓谷茂樹：2004「観光遺跡におけるマヤ・イメージの生産と消費」『マヤ・イメージの形成と消費に関する人類学および歴史学的研究』文部科学省科学研究費補助金基盤研究B(1)(課題番号14401009)報告書。
- 仙台市富沢遺跡保存館(地底の森ミュージアム)：2012『地底の森ミュージアム年報』2012、平成24年度。
- 茅野市・茅野市教育委員会：2010『縄文プロジェクト構想』
- 東北歴史博物館：2013『東北歴史博物館年報』、平成24年度。
- 中谷可奈：2013「遺跡博物館における『語り』の役割—地底の森ミュージアム来館者アンケートの考察から—」『地底の森ミュージアム研究報告』2012、23～31頁、仙台市富沢遺跡保存館。
- 長野日報朝刊：2013「検定合格者が初の展示解説」、2013. 8. 13付記事

- 中村慎一：2011 「文化遺産から文化資源へ」『テキスト文化資源学』7～11頁，金沢大学国際文化資源学研究センター。
- 日本博物館協会：2009 『日本の博物館総合調査研究報告書』，平成20年度文部科学省委託事業。
- 土生田純之：2008 「文化財の保存と活用」『専修大学人文科学研究月報 小特集「文化遺産の保存と活用」』第237号，3～14頁，専修大学人文科学研究所。
- 村野正景：2012 「学芸員や研究者の立ち位置についての素描」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第24号，35～59頁。
- 諸岡博熊：2003 『みんなの博物館—マネジメント・ミュージアムの時代』日本地域社会研究所。
- 【閲覧web】**
- 「大学院の教育研究の質的向上に関する審議のまとめ（大学審議会・報告）」，文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/attach/1315794.htm
 (2013年6月27日にアクセス)
- 「人社系プログラム2010年度採択事業」，日本学術振興会
<http://zunou.jsps.go.jp/program/J2202.html>
 (2013年6月27日にアクセス)
- 「文化資源学研究専攻」，東京大学人文社会系研究科文化資源学研究室
<http://www.lu-tokyo.ac.jp/CR/overview.html>
 (2013年6月27日にアクセス)
- 「文化資源学会設立趣意書」，文化資源学会
<http://www.lu-tokyo.ac.jp/CR/acr/overview/shuisho.html> (2013年6月27日にアクセス)
- 「形態文化資源部門」，金沢大学国際文化資源学研究センター
<http://crs.w3.kanazawa-u.ac.jp/section/01/index.html>
 (2013年6月27日にアクセス)
- 「文化資源研究センター」，国立民族学博物館文化資源研究センター
<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/organization/rccr> (2013年6月27日にアクセス)
- 「特別史跡三内丸山遺跡」，三内丸山遺跡保存活用推進室
<http://sannaimaruyama.pref.aomori.jp/>
 (2013年8月12日にアクセス)
- 「都道府県巡り」，埼玉県
http://hukumusume.com/jap/011_saitama.htm
 (2013年8月15日にアクセス)
- 「行田観光ボランティア会」，行田市観光協会
<http://www.gyoda-kankoukyoukai.jp/volunteer.html> (2013年8月15日にアクセス)
- 「尖石縄文考古館」，茅野市
<http://www.city.chino.lg.jp/www/contents/1000001479000/> (2013年8月12日にアクセス)
- 「縄文プロジェクト構想について」，茅野市 (2013年8月12日にアクセス)
<http://www.city.chino.lg.jp/www/contents/1000001471000/index.html>
- 「報道発表資料7月」，名古屋市
<http://www.city.nagoya.jp/kyoiku/page/0000049832.html> (2013年9月16日にアクセス)
- 「若狭三方縄文博物館」，若狭三方縄文博物館
<http://www.town.fukui-wakasa.lg.jp/jomon/>
 (2013年9月16日にアクセス)
- 「尼崎市田能資料館」，尼崎市 (2013年9月16日にアクセス)
http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/gakusyu/104_ama_tano/taiken10_2.html
- 「萩まちじゅう博物館」，萩市まちじゅう博物館・世界遺産推進課
<http://machihaku.city.hagi.lg.jp/whats/kihon.htm>
 (2013年8月13日にアクセス)
- 「萩博物館」，萩博物館
<http://www.city.hagi.lg.jp/hagihaku/> (2013年8月13日にアクセス)
- 「公園案内：公園概要」，吉野ヶ里歴史公園
<http://www.yoshinogari.jp/contents2/?categoryId=1> (2013年9月16日にアクセス)
- 「一村一祭」，宮崎県商工観光労働部観光交流推進局
 (2013年9月3日にアクセス)
<http://matsuri.kanko-miyazaki.jp/search/search.php?key=39&kbn=evn>